

【熊本県地域婦人会連絡協議会賞】

優しさがあるから今がある

熊本県立松橋支援学校 高等部 1年 渡邊 皓亮

私が二歳の時です。インフルエンザから自己免疫性脳症を発症し、日常では車椅子を使ったり足に装具をつけて歩行したりしています。

小学生になり、地元の小学校の特別支援学級に入学しました。小学校では、休み時間に教室の中で遊ぶことが多かったです。体育の持久走では、運動場を一周走ることを目標に頑張りました。今考えると、活動する時に限られた状況が生じてしまうことがあった中でも、どんな時も周りの友達は私のことを快く迎えてくれました。きっとみんなは何気なく私のことを理解しようとしてくれていたのだと思います。それは、中学校に行っても変わりませんでした。

私は小・中学校を通してみんなと同じ授業を受けました。中学校の歴史の授業では、みんなで楽しみながら人物を覚えることができました。振り返ってみると、みんなと活動できる楽しさを知る時間だったと感じ、そういった日々が私にとって良い経験として残っています。

また、授業や受験勉強でわからないことがあると、友人や先生が積極的に教えてくれました。そのおかげもあって、成績が少し伸び、入学試験にも挑戦することができました。

他にも、バスの運転手さんが乗降の際にスロープを出してくれたこと、ショッピングモールのエレベーターで、途中から乗ってきたお客さんが、同じ階で降りる際に道を譲ってくれたこと…学校の外でも周りの人が私のことを理解してくれようとしていることを感じたことがありました。

現在に至るまでの十五年間、思えばいろいろな人に支えられていることに気がつきました。親、友人、学校の先生、医療関係の方々など、多くの人に支えられ、今の私がいることに感謝をしなくてはなりません。

病気にかかってしまったことがきっかけで、私には多くの出会いがありました。他人にとっては、病気というと嫌なことなのかもしれませんが、私は一つの個性として感じるがあります。このように考えることができるのも、不自由さがあっても受け入れてもらえる環境があったからこそだと考えます。みんなの優しさがあった場所だったからだと感じています。私がしてもらったことと同じようにはいかないかもしれませんが、困っている人がいたら助けられる人になりたいです。